

アメリカ 1890年代一世紀末の苦悩と混乱：
この時代をどう読むか

君塚淳一*・河内裕二**・関根健雄***

(2021年8月31日受理)

America in the 1890s: Its Struggling midst Chaos in the End of the Century

Junichi KIMIZUKA*, Yuji KAWAUCHI** and Takeo SEKINE***

(Accepted August 31, 2021)

1. 昇り詰める者たちと這いずり蠢く人たち（序として）

君塚淳一

本論考は2021年6月12日に英米文化学会第164回例会で君塚がシンポジウム企画者と司会者として他の研究者と発表した概説で使用したものを，論文として加筆しまとめたものである。また本稿を基に執筆者を加えて研究書にまとめる予定である。

はじめに（シンポジウムの概説）

1890年代アメリカは苦悩と混乱の10年間であったと言える。南北戦争後には，農本主義が衰退し，産業化は更に急激に進み，都市が発展すると，押し寄せた大量移民たちは，都市周縁のスラムに低賃金長時間労働者としてスウェットショップ（搾取工場）に飲み込まれた。時代は拝金主義で倫理は崩壊し，ストライキが横行した。一方，南部諸州の黒人（アフリカ系アメリカ人）に対するジムクロウ法（Jim Crow Law）が事実上，合法化となるプレッシー判決（Plessy v. Ferguson, 1896）が出され，リンチ数も激増する。そして先住民に関してはウーンデッド・ニーの虐殺（Wounded Knee Massacre, 1890）が起こり，白人アメリカはそれをフロンティアの消滅へと称した。文学では自然主義がこの苦悩する労働者の状況を描き出し，告発文学のマックレイカーたちも世直しに登場する。一方，このような世界に嫌悪を示して目を背けユートピア小説も流行ることになる。H. W. Brandsは*The Reckless Decade: America in the 1890s* (1995)の序文で“During the 1890s, Americans

*茨城大学教育学部 英語教育教室（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; English Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan).

**明星大学（〒191-8506 東京都日野市程久保 2-1-1; Meisei University, Hodokubo 2-1-1, Hino city, Tokyo).

***小山工業高等専門学校一般科（〒323-0806 栃木県小山市中久喜 771; Department of General Education, National Institute of Technology, Oyama College, Nakakuki 771, Oyama City, Tochigi).

agonized over what the twentieth century about to begin held for their country” (Brands 1)と 1890年代という時代の混沌を表している。この10年を「チャンスや権力を握り昇り詰める者」と「搾取され底辺で這いずり蠢く人たち」という両面から、その状況を照射し、世紀末のアメリカの苦悩と混乱を検証する。

(1) 産業の発展と都市における格差と周縁ー ゲット・リッチ・クイック，ソーシャル・ダーウイニズムとスラム

南北戦争後には農本主義が衰退し産業資本主義が発展すると、時代は新たなヒーローを生み出すことになった。彼らはみな経済的な成功者で、それはつまり莫大な富を築いた「アメリカン・ドリーム」を体現した者たちだった。例えば米西戦争報道でピューリッサーと互いに競い合った新聞王ハースト (William Randolph Hearst, 1863-1951)、石油王ロックフェラー (John Davison Rockefeller, 1839-1937)は独占的にスタンダード・オイル・トラストを築きあげ、鉄道王となったヴァンダービルト (Cornelius Vanderbilt, 1794-1877)。彼らが南北戦争後から大活躍する時代だ。Jackson Learsはその一方*Rebirth of a Nation: the Making of Modern America, 1877-1920* (2009)で以下のように解説している。

Already in the 1870s and 1880s, skilled workers were largely native-born, or else Northern or Western European, while the ranks of common laborers were swelled (in the Northeast and Midwest) by Newer Immigrants from Southern and Eastern Europe as well as African American migrants from the battered South, and (in the Southwest and far West) by Mexicans and Chinese. These were the outliers in the emerging labor movement: they would prove notoriously difficult to organize. They were isolated by language barriers, scorned by skilled workers (often on racial grounds), and even more footloose than the rest of the working population. (Lears 75)

事実シカゴへの黒人（アフリカ系）の流入は1890年代から増加し、1900年になると80%が流入組となる (Spear 12-13)と言われている。ちょうどニューヨークへのアフリカ系の移動も同時期で、都市への人の移動はヨーロッパからの新移民の大量流入と重なり、この時期には労働力が溢れていたことは明らかである。さらにその受け皿としては都市部に限らず、Beikが*The Miners of Windber: The Struggles of New Immigrants for Unionization, 1890s-1930s*で「鉄道と炭鉱や木材切り出し事業と鉄道事業の関係は重要で1880年代から1890年代にさかんに建設された」(Beik 14-18)と指摘しているように大量の労働人口は、さまざまな労力として飲み込まれていたことになる。だがその悲惨な労働環境はストライキという形でいずれ表われることになる。

(2) フロンティア消滅，移民増大，人種問題，ストライキなど様々な混乱の1890年代

1890年は黒人選挙権保護のためのフォース法案が上院で否決され、ミシシッピ州では憲法理解テストで黒人選挙権制限を定める法が採択される。一方、先住民の間ではゴーストダンスが起き、ウンデッド・ニーの虐殺が行われ、アメリカ政府はこの年を大陸の最西端に到達しフロンティアの消滅とした。

1892 年には黒人へのリンチ数が増加する（1895 年にリンチ数最高となる）一方で、シカゴへの黒人の大量流入で、黒人ゲッターができあがる。既に南部の黒人の代表として君臨していた『奴隷から身を起こして』(*Up from the Slavery*, 1901) で後に世界的に有名になるブッカー・T・ワシントンが 1896 年「アトランタ綿作博覧会」で演説し、その内容が白人に妥協していると、北部黒人のインテリ W・E・B・デュボイスと対立したのもこの時代だ。1880 年代から 1890 年代東欧と南欧系移民が増大するが、中でも東欧の中心はユダヤ人、南欧はイタリア人が多くを占めていた。

1893 年～1897 年にはいわゆる“Panic of 1893”と称される経済不況にアメリカは見舞われる。雇主の強引な利潤追求で労働者を窮地に陥れることになり、国内ではストライキが頻発した。1893 年にはたとえば多くの炭鉱でも賃金カットを流にストライキが起きる (Beik 152-154)。

(3) 文学：自然主義と告発文学（マックレイカー）、ユートピア小説

アメリカ文学史の流れに沿えば南北戦争後にローカルカラーの文学、リアリズムからナチュラリズム、告発文学のマックレイカーが登場する。ナチュラリズムやマックレイキングは新移民を対象とする劣悪な労働条件とそれが惹き起こす格差社会を告発することとなる。金権主義による強力な支配（財力が人間の価値を計る尺度）により、精神主義の衰退、倫理性・日常の道德意識の低下が雇主の強引な利潤追求で労働者を窮地に陥れることになり、国内ではストライキが頻発した。Otto L. Bettmann はいわゆる南北戦争以降の産業中心の時代の都市環境の悲惨さを解説するが 1880 年代から 1890 年代がやはり中心だ。このような中、ユートピア小説の Edward Bellamy の *Looking Backward from 2000 to 1887* (1888) が出版されて広く読まれるなどの現象が起きる。また Jacob Riis は *How the Other Lives* を 1889 年に出版し、移民の悲惨な暮らしを写真付きで訴えた。

(4) まとめ

H. W. Brands の *The Reckless Decade: America in the 1890s* (1995) はアメリカのこの 10 年を政治、経済、文化から見直す大著だが、序文で Brands が述べるのは、「アメリカは大国として成人するのか、あるいは砕け散るのか」という不安と苦悩を抱えていた。フロンティアの終焉は、広大な大地をアメリカに残したが、同時にこの「苦悩と混乱の時代」に終焉の危機を感じさせてもいたという指摘は興味深い。また *The New Empire: An Interpretation of American Expansion 1860-1898* (1963) の VIII 章は、「アメリカが 1898 年にキューバをはじめスペイン植民地を解放した米西戦争（結果アメリカがスペインからフィリピン、グアム、プエルトリコを領有することになる）を振り返り、1961 年のキューバ危機がキューバを解放していなければどうなっていたか」に触れた Walter LaFeber の冷戦時代に記した著作だが、19 世紀末の混乱は数十年後のアメリカの危機にまで影響しているということになる。

さて今回のテーマとした「アメリカ 1890 年代—世紀末の苦悩と混乱：この時代をどう読むか—昇り詰める者たちと這いずり蠢く人たち」シンポジウムをもとにまとめたこの論考である。特にユダヤ人を中心にした「移民流入」の問題を河内氏が、アメリカ先住民の状況を関根氏がまとめた。既述したように照射する角度はまだ多くあるが、今回はこの点に絞って掘り下げた。今後さらに広げていきたい。

（参考文献）

- Beik, Mildred Allen. *The Miners of Windber: The Struggles of New Immigrants for Unionization, 1890s–1930s*. Pennsylvania UP, 1996.
- Bettmann, Otto L. *The Good Old Days They Were Terrible!* Random House, 1974.
- Brands, H. W. *The Reckless Decade: America in the 1890s*. U of Chicago Press, 1995.
- LaFeber, Walter. *The New Empire: An Interpretation of American Expansion 1860-1898*. Cornell UP, 1963.
- Lears, Jackson, *Rebirth of a Nation: The Making of Modern America, 1877-1920*. Harper Perennial, 2009.
- Morgan, Arthur E. *The Philosophy of Edward Bellamy*. A Wartime Book, 1945.
- Pettegrew, John, *Brutes in Suits: Male Sensibility in America, 1890-1920*. John Hopkins UP, 2007.
- Spear, Allen H, *Black Chicago: the Making of a Negro Ghetto 1890-1920*. U of Chicago Press, 1967.
- Ziff, Larzer, *The American 1890s: Life and Times of a Lost Generation*. The Viking Press, 1966.

2. 19世紀末アメリカの移民像

—ニューヨークのロウア・サイドに生きるヨーロッパからの大量移民たち¹⁾

河内裕二

はじめに

アメリカは世界で最も移民を受け入れてきた国であり、現在もそれは変わらない。Pew Research Centerによれば、アメリカの外国生まれの人口は2018年に過去最高の4480万人に達し、世界の移民の約5分の1を占めている。人口に占める移民の割合は13.7%となったが、この割合は1890年に記録した14.8%には及んでいない²⁾。

アメリカは建国時にすでに様々な国から移民が来ていた。1776年にトマス・ペインが『コモン・センス』で「イギリスではなくヨーロッパがアメリカの祖国である」と述べてアメリカの独立を訴えたのは、イギリス系以外の人々がいたからである。最初の連邦統計がとられた1790年にはイギリス系およびアイルランド系以外にドイツ系、オランダ系、フランス系、スウェーデン系の人々がいた。ただしイギリス系とアイルランド系が全体の約86%を占めており、その他はそれぞれ数%に過ぎない。スウェーデン系にいたっては0.3%である³⁾。その事実からすれば、現在のように多民族国家を含蓄する移民の国とは言い難い。ではアメリカが今で言う移民の国になるのはいつからだろうか。始まりはヨーロッパからの大量移民が来る19世紀からと考えてよいだろう。とくに19世紀末からはヨーロッパでもそれまでの西・北ヨーロッパ以外の地域からの移民が急増する。先述のように1890年には移民の割合が最も多くなるのである。本稿ではアメリカが移民国家に変貌する19世紀末の移民事情に目を向けその移民像を捉えてみたい。

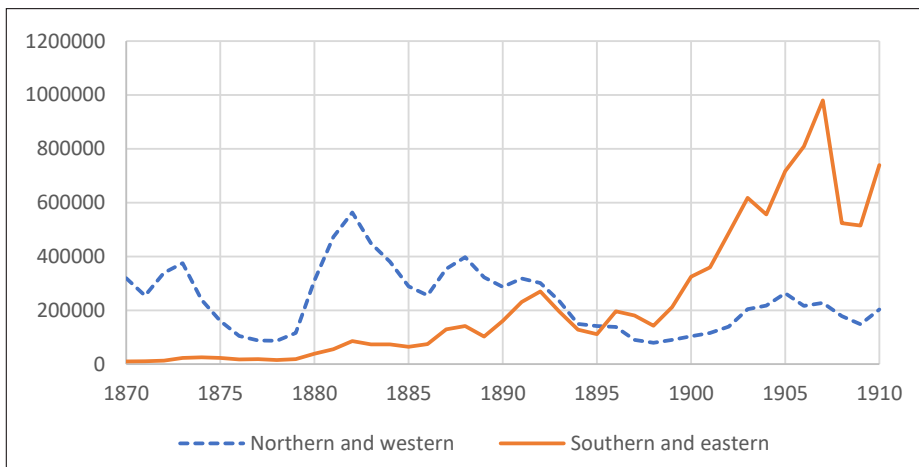
(1) アメリカ移民史における「旧移民」と「新移民」

アメリカには19世紀にヨーロッパ各地から大量の移民がやって来る。移民史では1880年代まで多数を占めた西・北ヨーロッパからの移民を「旧移民」と呼び、19世紀末から20世紀初頭に急

増した東・南ヨーロッパからの移民を「新移民」と呼ぶ。これらの移民のプッシュ要因は、ヨーロッパにおける人口爆発、農業の変容、革命と弾圧、宗教的迫害などとされる⁴⁾。確かに国や民族によって移民要因は様々であるが、彼らがアメリカに求めたのは、何よりも経済的な豊かさであった。19世紀に国土を一挙に拡大したアメリカは、農地開拓や鉄道建設のために多くの労働力を必要とし、さらに南北戦争後の急速な工業化により鉱山や工場で働く大量の労働者も必要とした。このような大きな労働力需要を充足し、産業発展の推進力となったのが移民であった。

急速な発展を遂げるアメリカは19世紀半ばには世界最大の農業国となり、さらに19世紀末にはイギリスを抜いて世界一の工業国となる。このアメリカの躍進こそが移民を引き寄せたのであり、移民流入とアメリカの経済状況は「異曲同工」である。この事実は移民統計から読み取ることができる。

表1 ヨーロッパからの移民数の推移 1870-1910



出典: Reports of the Immigration Commission: Statistical Review of Immigration 1820-1910, p.10-11.

「表1」は1870年から1910年までのヨーロッパからの新着移民数の推移をグラフ化したものである。破線は旧移民の数を、実線は新移民の数を表している。旧移民の数を見ると1873年から79年頃にかけて大きく減少している。この時期の経済に目を向けると、1873年にはヨーロッパ発の世界的な経済恐慌によりアメリカも影響を受けて不況となり、その後も景気低迷が続いている。景気は1879年が底となり、それから急速に回復し1882年にピークを迎える。このように移民数の推移と景気動向は一致する。79年からの景気回復に寄与したのが当時の基幹産業である鉄道だった。国内各地で鉄道建設が行われて「鉄道バブル」が起きていた。シカゴとサンフランシスコを結ぶ最初の大陸横断鉄道が完成したのは1869年だが、さらに北のミネソタからオレゴン、南のニューオリンズからロサンゼルスへの二路線の建設が進み1883年に完成する。この大プロジェクトが終わった83年に「鉄道バブル」が崩壊する。再び景気は後退し、不況が85年頃まで続く。ここでも移民数と経済の動向は一致する。

1892、93年頃からは新旧両移民の数が減り続けているが、ここでも93年にニューヨー

ク株式市場が暴落して恐慌が起こっている。翌 94 年頃には失業者が 300 万人を越えたと言われている。南北戦争後からこの 93 年の恐慌までが「金ぴか時代」(the Gilded Age) と呼ばれている。「金ぴか時代」には何度も恐慌が起こっているが、この期間は経済はレッセフェール（自由放任主義）で社会に「適者生存」のソーシャル・ダーウィニズムの考え方も広がり、大企業は恐慌で打撃を受けた企業を次々と吸収合併し巨大化していった。ロックフェラーのスタンダード・オイルやカーネギーのUSスチールなどが典型である。巨大企業による市場の独占により公正な競争ができなくなったため、1890 年には反トラスト法（独占禁止法）が作られる。当時の拝金主義風潮を揶揄して「金ぴか時代」と命名したのはマーク・トウェイン（Mark Twain, 1835-1910）である。

急速な経済発展を果たすアメリカで、機会を手にして豊かになる者もいたが、先着の旧移民に比べると、未曾有の規模で遅れて押し寄せた新移民は厳しい状況であった。新移民は祖国で貧しかった者がほとんどで、例えば 1899 年から 1903 年までの新移民で到着時に所持金が 30 ドルを超えていたのは、南イタリア人で 6.9%、ユダヤ人で 12.9%、ポーランド人で 5.1% だった。1904 年から 1910 年で金額が 50 ドル以上となると南イタリア人で 5.4%、ユダヤ人で 11.8%、ポーランド人で 2.8% であった⁹⁾。祖国で農地の所有が認められなかったユダヤ人を除けば、移民前は農業に従事していた者も多かった。彼らは度重なる凶作や新大陸からの農産物の流入により生活が困窮してアメリカに渡ったが、アメリカでは 1890 年にフロンティアの消滅が宣言されるようにすでに開拓する土地もなく、自営農民の道は閉ざされていた。

「表 2」は外国生まれの人口増加における地域比率であるが、1890 年以降の移民は農地に向く中西部（表では「北中部」と表記）ではなく、ほぼ北部大西洋岸に居住している。新移民の急増した 19 世紀末から 20 世紀初頭は、全移民の 7 割がニューヨークに到着した⁹⁾。所持金の少ない移民の多くは入国手続の行われたキャッスル・ガーデンやエリス島から程近いニューヨークのロウア・サイドに住み着いた。

表 2 外国生まれの人口増加における地域比率

地域	1850-60	1860-70	1870-80	1880-90	1890-1900
北部大西洋岸	36.9	34.8	26.4	41.8	80.1
北中部	47.1	55.3	52.4	44.5	9.0
南部大西洋岸	3.0	0.3	0.7	1.3	0.7
南中部	4.9	0.2	3.7	1.9	3.3
西部	8.0	9.4	16.8	10.5	6.9
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出典：Reports of the Immigration Commission: Abstract of Report of the Immigration Commission, p.131

(2) 旧世界からニューヨークへユダヤ系移民の場合

移民の中には最終的に祖国に戻る者もいたが、旧移民の中でユダヤ人は帰国率が低かった。統計によると 1908 年度から 1910 年度までの 3 年間で、移民として入国した外国人 100 人につき、アメリカを離れた移民外国人の数は、南イタリア人は 55 人、ポーランド人は 30 人であったが、ユ

ダヤ人は 8 人だった。統計には、1907～8 年の秋から冬にかけて金融恐慌があり 1908 年度の出国者数はかなり異常であったが、1909 年度と 10 年度は正常に近いものだったという説明がある⁷⁾。他年度の数値がないので年度による人数比較はできないが、平時よりは人数が多くなっていると、三者の帰国率を比較することは可能であろう。他に比べてユダヤ人の人数は明らかに少なく、これは出稼ぎ目的の移民が少なかったことを表すだろう。19 世紀末の移民の状況を理解するために、定着率の高かったユダヤ系移民に少し目を向けてみよう。

ユダヤ系の移民を考える場合、まず旧移民にもユダヤ人がいたことを押さえておく必要がある。1840 年代から増加するドイツ移民の中にドイツに住むユダヤ人も含まれていた。ドイツでは機械化による手工業者の貧窮や、1848 年革命後の社会混乱や政情不安などにより、貧困層だけでなく中産階級の労働者や商人も新たな機会を求めてアメリカに移住した。その中にジャーマン・ジュウがいて 25 万人ほどがアメリカに移住したと言われている。彼らには行商人などから始めて衣服製造業、流通や小売業、金融業などで成功を取めた者も多い。衣服のリーバイ・ストラウス、百貨店のメイシーズ、サックス・フィフス・アベニュー、ブルーミングデールズ、投資銀行のクーン・ロウプ社、J&W・セグリマン社、リーマン・ブラザース社、ゴールドマン・サックス社などはみなジャーマン・ジュウの創業である。

ドイツ社会やアメリカ社会に同化して成功を取めた旧移民のジャーマン・ジュウに続いて、20 世紀転換期にはロシア・東欧から大量のユダヤ人がアメリカにやって来た。ジャーマン・ジュウがユダヤ教の改革派でユダヤ教の戒律に縛られなかったのに対して、ロシア・東欧のユダヤ人は正統派のユダヤ教徒でユダヤ教の伝統や戒律を遵守して生活していた。彼らの多くはペール居住区 (Pale of Settlement) と呼ばれる帝国ロシア領のユダヤ人制限居住地域で暮らしていた。アメリカの移民統計ではユダヤ人のカウントが始まるのは 1899 年で、それまでは各出身国に含められユダヤ移民の数値はない。『アメリカ・ユダヤ年鑑』によると、アメリカのユダヤ人口は 1880 年の約 28 万人から 1930 年には約 420 万人まで増加している。ロシア・東欧のユダヤ人がこの時期に旧世界を後にした要因について、ラビ・リー・J・レヴィンジャーは、1881 年以降にボグロムと呼ばれるユダヤ人虐殺が頻発し、さらに 1882 年の五月法施行によりユダヤ人の居住や経済活動が制限され、経済状況が悪化したからであると述べている⁸⁾。

ユダヤ系の移民作家アンジア・イージアスカ (Anzia Yeziarska, 1880?-1970) も 1890 年代にロシア領ポーランドのプロックを後にしてニューヨークに移住した一人である。イージアスカは *Hungry Hearts* (1920) 所収の短編 “How I Found America” でロシアからアメリカに移住する一家の様子を描いている。一家はコサック兵に怯えながら一間だけの泥壁の家に住んで貧しい生活を送っている。彼らはユダヤ人に対する差別的な法律により行動も制約され、貧困から抜け出す手立てがない。貧困で苦しむ彼らが憧れるのが自由で豊かなアメリカである。アメリカについての情報はすでにアメリカに渡った親戚や村人からの手紙で得ていて、彼らの報告を聞いて誰もがアメリカ行きを熱望するのである。主人公の母親は「貧乏人でアメリカを夢見ない者がどこにいる」⁹⁾と述べるが、渡航費を用意できた者は旧世界に見切りをつけて新天地アメリカへ渡るのである。

ユダヤ人の場合、移民は家族単位であった。家族の誰かが先にアメリカに渡って渡航費を稼いで残りの家族を呼び寄せる場合と自国で渡航費を工面して一家でやって来る場合があった。作家のメアリー・アンティン (Mary Antin, 1881-1949) の場合は、彼女の父親が先に渡り家族を呼び寄せる

までに3年も掛かっている。レヴィンジャーによれば、この時期に移民したロシア・東欧系ユダヤ人の72%は貧困状態にあり、同郷人と暮らしたいという願望を持っていて、彼らのほとんどが最初に来て来たニューヨークのロウア・イースト・サイドに住み着いている¹⁰⁾。当時、ロウア・イースト・サイドのユダヤ地区にはハンガリー、ガリシア、ルーマニア、レヴァント、ロシアの5つの出身地別に分かれた5地区が並んで形成されていた¹¹⁾。この地域がユダヤ人地区になったのは、先着のジャーマン・ジューが衣服工場などを作っていて、そこでユダヤ移民が働いたためである。彼らは言葉の問題やユダヤ教の安息日や祭日を守るために、理解が得やすい同じユダヤ人の下で働くことを望んだ。歴史学者ハイコ・ハウマンは当時のロウア・イースト・サイドについて「東方のユダヤ人のシュテットルが、アメリカ合衆国でも再び出現した」¹²⁾と述べるが、ユダヤ人地区には旧世界のユダヤの伝統や習慣がそのまま持ち込まれた。シナゴークやユダヤ教の食事規程コーシャに準ずる食品を扱う店、話されている言葉がイディッシュ語のため、イディッシュ語新聞が刊行され、劇場でもイディッシュ演劇が上演された。この狭い地域に次々とユダヤ移民たちが押し寄せたので、信じられないほどの人口過密状態であった。1900年にユダヤ地区で最も過密な場所の人口密度は1エーカー当たり700人を超えていたとされる¹³⁾。現在の東京23区の人口密度は1エーカー当たり61人であるので、いかに密集していたのかわかる。

“How I Found America”の主人公は、アメリカに到着して初めてロウア・イースト・サイドを見たときに「長年夢に見てきた黄金の国はどこなの¹⁴⁾」と心の中で叫ぶ。彼女の母親も、これから家族で暮らす部屋を見て、光の入らない暗くて狭い様子に「墓の中にいるみたいだ¹⁵⁾」と落胆する。ロウア・イースト・サイドには旧世界と同じ貧困が広がっていた。

ロウア・サイドに移り住んだのはユダヤ移民だけではない。先述のようにニューヨーク港に到着した貧しい新移民の多くがこの地域に流入した。さらに仕事や機会を求めてニューヨークに集まって来たアメリカ国内の貧しい人々もいた。急速な都市化によりスラム化したロウア・サイドは人口過密で貧困、病気、犯罪が蔓延した。この劣悪な環境を象徴するのがテネメントであった。テネメントとは集合住宅で、かつての中産階級の住居を小さく区切って賃貸住宅にしたものである。このテネメントに焦点を当てニューヨークの抱える都市問題を世に知らしめたのがジャーナリストのジェイコブ・リース（Jacob A. Riis, 1849-1914）だった。

(3) ジェイコブ・リースの見た移民たち

ジェイコブ・リースは『向こう半分の人々の暮らし』(*How the Other Half Lives*, 1890)で、豊かな人々の知らないニューヨークのテネメントの実態とそこに生きる最下層の人々の生活を描いた。綿密な調査を行い、当時はまだ珍しかった写真も取り入れた写真ジャーナリズムで世の中に状況改善を訴えた。出版当時は技術的に写真を鮮明に印刷することが難しかったため残念ながら多くの写真が挿絵化されて掲載されたが、1971年にDover Booksから出版された版ではオリジナルの写真が収録されている。Dover Books版に付けられたチャールズ・マディソンによる序文には、後に大統領となる若き日のセオドア・ローズヴェルト（Theodore Roosevelt, 1858-1919）も本書に触発され改革に取り組んだとあるので、本書が社会に与えた影響が大きかったのは間違いない。

リースは序文で、人の習慣や道徳は生活と住居によって少なからず形作られるので、清潔で快適な住宅に暮らせば病気や犯罪はなくなるとの旨のことを記している。テネメントを病気や犯罪の温

床にしているのは、彼の言葉で言えば「資本家の強欲」である。家主はテナメントを投機対象としか考えず、人口過多による超過需要のために入居者は劣悪な環境に高い家賃を払わされている。リースはロウア・サイドについて、国際色豊かでいかなる国からの移民の居住区も見つけることができるかもしれないが、唯一存在しないのが「アメリカ人コミュニティ」であると述べる¹⁶⁾。ロウア・サイドで起こっていることはアメリカの問題であって「向こうの半分」だけの問題ではない。リースはテナメント問題とは何かを明らかにするために、テナメントとその住民を精察している。そこで本書に示される移民像を読み取ってみたい。

リースは新移民であるイタリア人とユダヤ人について、多くの点で絶望的なまでに異なるが、行く先々をスラムにするのは共通であると述べる¹⁷⁾。どちらも街をスラム化するほど極貧で人数も多かったということになるが、貧しい人々が同じ地域に集まって同じようなテナメントで生活していても、出身国や民族によって違いが出る。例えばイタリア人は太陽が照りつけていれば全員が戸外に出て通りや歩道で過ごし、家にいるのは雨が降っているか病気になった時だけである。それに対してユダヤ人はいつもうだるような暑さの狭苦しい部屋に閉じこもっている¹⁸⁾。ラテン系とユダヤ系の人々の性格の違いといえればそれまでだが、リースは彼らを歴史的・社会的な観点からも見ている。

リースの分析では、ユダヤ人は金でしか自由の買えない場所から迫害を逃れてやって来たため、金に対して過剰なまでの情熱を持つようになり、移民前よりも金にとらわれている。少しでも金を貯めようと昼夜を問わず働き、疲れ果てて徐々に衰弱してゆくユダヤ人の例に何度も出会ったと自らの経験を語る¹⁹⁾。病気になって働けなくなれば貯めた金もすべて無くなってしまうだろう。しかし一日も早く貧困から抜け出すためには猛烈に働くしかない。

ユダヤ人は衣服産業で働いた者が多い。ユダヤ人にとって衣服製造は伝統的な職業であり、先着のドイツ系がこの地区に衣服産業を興していたので、多くのユダヤ人が衣服生産の仕事に従事したが、費用を抑え大量に生産するために下請けによる分業生産が徹底された。テナメントにミシンな



スウェットショップでネクタイを作るユダヤ系移民たち
(1899年)

出典：How the Other Half lives: Studies Among the Tenements of
New York

などの道具や大量の素材が持ち込まれ、工場では適用される労働基準を逃れ、劣悪な環境での低賃金で長時間の労働が行われた。工場ではできない1日10時間以上の労働や就業禁止の14歳以下や英語の読み書きのできない16歳以下の子供による労働も行われた。このような作業場はスウェットショップと呼ばれ、雇用主による「搾取」もしばしば行われたが、分業のために技能習得も短期間で行えて英語も必要ないために、新参者の多くが働いた。リースはユダヤ人地区のテナメントのそこかしこからミシンの音がするのを聞いている。

イタリア人については、その特徴を陽気で明るく、怒らせなければ子供のように無邪気

であると述べている²⁰⁾。スラム街では、争い好きなアイルランド人や秩序を重んじるドイツ人よりも「問題を起こさない」住民として歓迎されていて、「豚小屋」に住むことに満足し、家賃徴収人による集金にも黙って従うとしている²¹⁾。イタリア人女性については、誠実な妻であり、献身的な母親であり、その鮮やかで絵のような衣装は、彼らの住むスラムの退屈な単調さに彩を与えると言っている²²⁾。ユダヤ人女性のことを年老いた女性は醜く若い女性は魅力的で、16歳で妻と母親になり30歳で老いてしまう²³⁾と述べているのと比べると、かなり印象がよい。

イタリア人の仕事に関しては、リースはあまり詳しく論じていない。ぼろ拾いや灰の回収業さらにもぐり酒場の経営などが言及され、イタリア人のぼろ拾いは、たちまち街角の果物売りを独占するようになり、少年たちも靴磨きの仕事を独占していると述べている²⁴⁾。Samuel L. Bailly, *Immigrants in the Lands of Promise: Italians in Buenos Aires and New York City, 1870-1914* (1999)によれば、1900年のニューヨークの男性労働人口に占めるイタリア人の割合は6.7%だったが、イタリア人の割合が高い職業としては日雇い労働者全体の約25%、男性理髪師の55%、ブーツ職人の97%、靴職人の34%、石工の18%であった。さらに女性ではイタリア人は労働人口の3.3%を占め、職業は仕立て屋の25%、裁縫師の5.6%、ドレスメーカーの4.0%を占めていた²⁵⁾。この統計値はリースが見たニューヨークより10年ほどが経過した時点のものであるが、他のユダヤ系などと比べると熟練労働者の割合が少ない印象を受ける。イタリア人はパドローネ制度と呼ばれる労働請負制度によって契約労働者としてやって来た者も多いし、出稼ぎで来ていた割合も他の移民よりも高かったからかもしれないが、社会的地位の上昇はやや遅いといえる。英語についてのリースの次のような発言はその理由の一端をうかがわせる。言うまでもなく移民にとって英語は貧困を抜け出すカギである。

イタリア人は英語を全く知らないだけでなく、学ぶのに十分な知識もない。イタリア語を書くことができる者もまれである。上陸したその日から義務として英語を学び始めるドイツ人や、投資としてできる限り早く英語を学ぶユダヤ人とは異なり、イタリア人は英語を学ぶにしてもゆっくり学ぶ。アメリカ生まれの息子でさえしばしばイタリア語を無頓着に話す²⁶⁾。

20世紀初頭のアメリカは「革新主義の時代」とも呼ばれ、社会改革が推し進められる時期である。南北戦争後の急速な変化により生じた様々な問題を解決すべく政治や経済を始めあらゆる分野で改革が進められる。イージアスカの“*How I Found America*”の主人公もこの社会改革について言及している。彼女の働くスウェットショップもこの改革によって少しずつではあるが労働環境が改善され、作業単価も上がっている。「革新主義の時代」とそれに続く「狂騒の20年代」でアメリカはさらに経済成長を続けるが、移民の生活も実際に徐々に向上している。チャールズ・E・シルバーマンによれば、ユダヤ系移民は1900年にはブルーカラーの労働者が多く事務職や専門職は10%に過ぎなかったが、ニューヨークでは15年から25年以内に半数以上が中産階級になる。それでもユダヤ系移民の3分1以上は生涯ブルーカラーの域を出なかったのも事実である²⁷⁾。

ユダヤ系以外の他の移民たちもその早さにこそ違いがあれ、同様の道を歩んでゆく。たとえ移民1世がロウア・サイドを抜け出せなくても、次の世代あるいはその次の世代は抜け出し、リースが「向こう半分」と呼んだ側ではない「半分」として生きてゆくのである。

- 1) 本稿は英米文化学会第 163 回例会のシンポジウム：『アメリカ 1890 年代—世紀末の苦悩と混乱—〈昇り詰める者たち〉と〈這いずり蠢く人たち〉』（2021 年 6 月 12 日オンライン開催）の口頭発表のタイトルおよび内容を大幅に変更・加筆したものである。
- 2) Pew Research Center, “Key findings about U.S. immigrants”, August 20, 2020. Washington, DC: Pew Research Center. Available: <https://www.pewresearch.org/fact-tank/2020/08/20/key-findings-about-u-s-immigrants/> [August 2021].
- 3) Thomas L. Purvis, “The European Ancestry of the United States Population, 1790: A Symposium” *The William and Mary Quarterly*, Vol. 41, No. 1 (Jan., 1984), Omohundro Institute of Early American History and Culture, p.98.
- 4) ナンシー・グリーン著、村上伸子訳『多民族の国—移民たちの歴史』創元社、1997 年、25-30 頁。
- 5) William P. Dillingham, Reports of the Immigration Commission: Abstract of Report of the Immigration Commission, Washington: Government Printing Office, 1911, p.103.
- 6) Peter Morton Coan, *Ellis Island Interviews: In Their Own Words*, New York: Facts On File, Incorporated, 1998, p6.
- 7) William P. Dillingham, Reports of the Immigration Commission: Abstract of Report of the Immigration Commission, p.113.
- 8) Rabbi Lee J. Levinger, *A history of the Jews in the United States*. New York: Union of American Hebrew Congregations, 1961, p.269.
- 9) Anzia Yezierska, *Hungry Hearts and Other Stories* (1920). Persea Books, 1991, p.259.
- 10) Rabbi Lee J. Levinger, *A history of the Jews in the United States*, p.276.
- 11) Moses Rischin, *The Promised City: New York Jews, 1870-1914*. Harvard UP, 1978, p76.
- 12) ハイコ・ハウマン『東方ユダヤ人の歴史』平田達治、荒島浩雅訳、鳥影社、1999 年、249 頁。
- 13) Moses Rischin, *The Promised City: New York Jews, 1870-1914*, p79.
- 14) Anzia Yezierska, *Hungry Hearts and Other Stories*, p.263.
- 15) *Ibid.*, 264.
- 16) Jacob A. Riis, *How the Other Half Lives: Studies Among the Tenements of New York*, New York: Charles Scribner’s Sons, 1890, p.21.
- 17) *Ibid.*, 26.
- 18) *Ibid.*, 57.
- 19) *Ibid.*, 107.
- 20) *Ibid.*, 53.
- 21) *Ibid.*, 48.
- 22) *Ibid.*, 53.
- 23) *Ibid.*, 104.
- 24) *Ibid.*, 24.
- 25) Samuel L. Baily, *Immigrants in the Lands of Promise: Italians in Buenos Aires and New York City, 1870-1914*, 1999, p.100.
- 26) Jacob A. Riis, *How the Other Half Lives: Studies Among the Tenements of New York*, p.49.
- 27) チャールズ・E・シルバーマン『アメリカのユダヤ人—ある民族の肖像』武田尚子訳、サイマル出版社、1988 年、176-177 頁。

引用文献

- Baily, Samuel L.. *Immigrants in the Lands of Promise: Italians in Buenos Aires and New York City, 1870-1914*, 1999.
- Coan, Peter Morton. *Ellis Island Interviews: In Their Own Words* (New York: Facts On File, Incorporated, 1998).
- Dillingham, William P., *Reports of the Immigration Commission: Abstract of Report of the Immigration Commission*, Washington: Government Printing Office, 1911.
- Dillingham, William P., *Reports of the Immigration Commission: Statistical Review of Immigration 1820-1910; Distribution of Immigrants 1850-1900*, Washington: Government Printing Office, 1911.
- Levinger, Rabbi Lee J., *A history of the Jews in the United States*. New York: Union of American Hebrew Congregations, 1961.
- Purvis, Thomas L. "The European Ancestry of the United States Population, 1790: A Symposium" *The William and Mary Quarterly*, Vol. 41, No. 1 (Jan., 1984), Omohundro Institute of Early American History and Culture, pp. 85-101.
- Riis, Jacob A. *How the Other Half lives: Studies Among the Tenements of New York* New York: Charles Scribner's Sons, 1890.
- _____. *How the Other Half lives: Studies Among the Tenements of New York* New York: Dover Publications, Inc., 1971
- Rischin, Moses. *The Promised City: New York Jews, 1870-1914*. Harvard UP, 1978.
- Yeziarska, Anzia. *Hungry Hearts and Other Stories* (1920). Persea Books, 1991.
- グリーン, ナンシー 『多民族の国－移民たちの歴史』 村上伸子訳, 創元社, 1997年.
- シルバーマン, チャールズ・E. 『アメリカのユダヤ人－ある民族の肖像』 武田尚子訳, サイマル出版社, 1988年.
- ハウマン, ハイコ 『東方ユダヤ人の歴史』 平田達治, 荒島浩雅訳, 鳥影社, 1999年.

3. 「フロンティアの消滅」と先住民:排除・同化・再領土化⁽¹⁾

関根健雄

はじめに

1893年、歴史家のFrederick Jackson Turner (1861-1932)は「アメリカ史におけるフロンティアの意義 (The Significance of the Frontier in American History)」において、1890年の国勢調査で「フロンティア」の消滅が宣言されたことに言及し、「アメリカの最初の時代の終焉」をペシミズムたっぷりに謳いあげた(大井 13-14)。1890年は「ウンデッド・ニーの虐殺」として知られる大規模な虐殺によって、先住民²⁾の軍事的掃討が事実上完了した年であり、この論文が発表された1893年はコロンブスの新大陸到着400年を記念した「シカゴ万博」が開かれ、アメリカの「フロンティア」が「地理的・農業的」なものから「都市的・産業的」なものへ変化したことが露わとなった。この章においては、南北戦争後の先住民政策から「ウンデッド・ニーの虐殺」に至る虐殺と先住民社会・文化破壊の流れ、さらに「ワイルド・ウエスト・ショー」において先住民が娯楽としての消

費される構図が後世へと続いていくことを中心に考察することで、アメリカの新しい時代の幕開けに際し、搾取され、這いずり蠢くことになる先住民の姿について検証しつつ、改めてアメリカ史における 1890 年代という時代の意義を考えていきたい。

(1) 南北戦争後の先住民政策—排除と同化の混在

南北戦争（1861-1865）終結後、アメリカは合衆国陸軍の武力を投入し先住民を掃討し土地の篡奪を加速していく。1870 年代半ばをピークに、北はカナダ国境から南はメキシコ国境まで、西はオレゴン、カリフォルニアまでと合衆国の西半分の広大な地域で、先住民の非戦闘員と双方で多くの戦死者を出した(富田 166)。その背景には、鉄道や通信網の発達、資源の需要と白人の「フロンティア」への流入等、アメリカの産業化・工業化があった。

先住民を掃討し「フロンティア」を自らのものにする「マニフェスト・デスティニー」は、合衆国による先住民虐殺と不道德の歴史でもある。映画 *Soldier Blue* (1970) でも描かれた「サンド・クリークの虐殺」(1864 年) では、約 800 人の騎兵隊がシャイアン族 500 人の約 3 分の 1、主に女性、子ども、老人を虐殺した。「ララミー砦条約」(1868 年) では、サウスダコタ、ノースダコタ、ネブラスカ、ワイオミングにまたがる「大スー保留地」を確約しながら、1874 年にカスター將軍の遠征により「聖地」ブラックヒルズで金鉱が発見されると白人が殺到、スー族の抗議に対し合衆国は軍を派遣して白人を保護する形で答え、ラコタ・スーの保留地は無実化する。さらに、スー、シャイアン、アラパホの連合軍がカスター將軍の第 7 騎兵隊を敗り、映画 *Little Big Man* (1970) でも描かれた「リトルビッグホーンの戦い」(1876 年) は先住民掃討の激化を招く。なお、ブラックヒルズは「ブラックヒルズ条約」(1877 年) で取用されている。このように、合衆国は軍勢力を背景に先住民を掃討・移住させ、強制移住させた土地に利用価値が見つければ再度武力によって条約を反故にし先住民を追い立てることが繰り返されたのである。

虐殺だけではなく、法律による「合法的」な土地の篡奪も実行された。「ドーズ法」として知られる「一般土地割当法」(1887 年) である。先住民を文明化し、部族社会の解体を目的としたこの法律は、先住民の土地を先住民に割り当て、独立自営農民化を図ったものである。背景には、先住民に市民権を付与して合衆国市民とすることで先住民政策費の予算削減と、余剰地を開拓者、鉄道・森林・鉱山・牧畜・土地投機業者への割譲があった。当初、土地の売買は禁止されていたが、農耕に適さない土地を先住民は売却して生活費に充てた。また、先住民の養子や配偶者となった白人による相続によって、原因不明の死や土地譲渡後に突如消える花婿や花嫁が増加した。結果、先住民社会と保留地は物理的に分断される。1887 年には 1 億 3800 万エーカーあった先住民の土地が 1934 年には約 3 分の 1 の 4800 万エーカーにまで減少するなど、土地の「合法的」取用を推し進め、「フロンティアの消滅」を加速させた。

先住民の排除とともに、寄宿学校による「同化」も推し進められた。1870 年代以降、「消えゆく民」である先住民に同情した「インディアンの友」の手によって部族社会から強制的に子どもを隔離し「キリスト教化」「労働者化」「文明化」が寄宿学校で実行された。抵抗する親には食料供給停止をちらつかせ、子どもたちには厳しい体罰で部族語の使用禁止などの「文明化」が執行された。もともと先住民が「アメリカ人」と同等になるとは考えられておらず、最底辺の労働者としての教育が施され、校内には墓地があったことからこの施策の歪みが窺える。³⁾1934 年の「インディアン再組

織法」まで続いた寄宿学校制度は、結果的に当初の目的からは「失敗」だったものの、先住民が白人社会を経験したこと、キリスト教化によって教会が部族・地域を繋ぐ場として機能したこと、そして何より英語を武器に部族社会やその後の民族運動の礎となる若者を生み出したことは特筆すべきだ。1911年に設立された「アメリカ・インディアン協会（Society of American Indians）」の中心メンバーの多くが18人のうち11人がカーライル寄宿学校の卒業生であるなど（内田 25）、社会の底辺で這いずり蠢きながらも次の時代への萌芽は確実に存在していたのである。

（2）「ウンデッド・ニーの虐殺」―背景と虐殺を生き延びた先住民の少女の生涯

武力による排除と同化政策によって部族社会の解体が進む中、荒野の保留地に押し込められた先住民は貧困に喘いでいた。平原インディアンにとって重要な食糧減であったバッファローはほぼ全滅した。スー族は「グレート・スー協定」（1889年）による土地の喪失、保留地の荒地での農耕奨励を名目にした食料供給の半減、イナゴの大群や早魃によって農業は破綻し飢餓状態に陥っていた。ここに文化的抑圧が加わったことが「ウンデッド・ニーの虐殺」へと繋がっていく。

先住民文化への不寛容は宗教的儀式の抑制に繋がった。1883年、合衆国は「サンダンス」を禁止する。「サンダンス」とは平原インディアン最大の儀式であり、4日間飲食せずに夜明けから日没まで行われ、ハコヤナギの枝と胸や背中ofピアシングを結び、自ら肉を引き裂く儀式である。「キリスト教化」「文明化」の観点から、こうした流血を伴う「野蛮な踊り」は先住民の同化の障害としてだけでなく、反乱・反抗の温床と見なされた。さらに、1888年頃からヴォヴォカ（Wovoka）によって始まった「ゴーストダンス」信仰はバッファローと豊かな生活の復活、平和など救済を祈って踊り、歌うものであり、武力闘争が限界を迎えた先住民がすがった新たな信仰であったが、運動の拡大に伴って行動主義的な変革要素が濃くなり、白人社会への抵抗運動として捉えられた（富田 180-182）。この時期、度重なる武力掃討と文化・社会の破壊から、先住民に抵抗する力は最早残ってはいなかったが、北部での帰依者の増加も相まって、白人社会の先住民に対する不安や危機感の高まりを招いた。

1890年12月、「カスター殺し」として、また当時人気を博していた「ワイルド・ウエスト・ショー」にも出演していたSitting Bull（1881-1890）が、ゴーストダンスの指導者となって先住民を扇動し、反抗することを恐れ、インディアン警官隊が彼の逮捕に向かったが、銃撃戦となり彼は死亡する。そして、スー族約350名のパイニンッジ保留地ウンデッド・ニーにおける武装解除の際、銃撃戦となり先住民の約300名が死亡する。ここでも大半が女性や子どもなどの非戦闘員であった。これが「ウンデッド・ニーの虐殺」であり、この虐殺をもって大規模な武力による排除は終了し、「フロンティア」が消滅する。

この虐殺を生き残り、白人夫婦の養子となって数奇な運命に翻弄され、短い生涯を送った少女が存在する。その少女Zintkala Nuni（Zintka, Lost Bird）は、虐殺の4日後に母親と思しき女性の遺体の下から発見された。軍人・法律家のLeonard W. Colby（1846-1924）は彼女の存在を聞きつけると、自身の尊敬するAndrew Jackson（1767-1845）が先住民の子どもを養子にしたことに倣い、自らを先住民（Seneca）の血を引く者だと言い張って強引に奪い去って養子にした。彼は、Jackson同様、「インディアン・ファイター」でありながらも人道的な人物であることのアピールとして、彼女をいわば「インディアン戦争のトロフィー」として利用することが目的であった（Flood

70-84)。彼の妻で、教育者、女性参政権論者、新聞発行人でもあったClara W. Calby (1846-1916) は、自身を「インディアンの友」であり、先住民を「キリスト教化」「文明化」することが最善だと深く信じていたが、先住民のことをよく知らなかった (Flood 109)。

LeonardはZintkaの養父として名を売るが、彼女の乳母であった愛人の下に去ってしまう。彼は愛人であるMaudとの間に子どもが生れるとZintkaへの興味を失い、養育費や学費の支払いをたてに離婚を迫ったため、離婚を固辞し続けたClaraとZintkaは貧困に喘ぎ、Claraの活動も生活の困窮に拍車をかけることとなる (Flood 200-225)。また、身体的には白人ではなく、文化的には先住民でないZintkaは学校や社会に適応できなかった (Flood 246)。17歳でLeonardとMaudの下に送られるが、莫大な遺産を相続したMaudには毛嫌いされ、妊娠・死産を経て、厄介払いのようなかたちで再びClaraの下に戻る (Flood 250-270)。その後、Zintkaは結婚し、長男を授かるが、夫の酒と暴力により離婚する (Flood 275-276)。西部劇や「ワイルド・ウエスト・ショー」に薄給で出演する中、2度目の結婚で次男に恵まれるものの、夫の病氣と貧困に悩まされ、売春・梅毒に苦しんだ (Flood 279-287)。貧困の中、次男を失い、長男も養子に出し、1920年に大流行したスペイン風邪により僅か30歳(推定)で死去している (Flood 289-299)。

彼女は、最後の大規模な先住民虐殺で血縁から切り離され、白人社会や寄宿学校で先住民文化から切り離され疎外された。また、先住民、女性として搾取され、家族・我が子とも切り離された。彼女を利用したLeonardが富と名声を得たのとは対照的に、底辺を這いずり蠢く者としてその短い生涯を生きたのである。

(3) 「ワイルド・ウエスト・ショー」とシカゴ万博—新しい時代の到来とノスタルジー

1893年に開催され、鉄道や電気、キネスコープ等の最新の科学技術を展示した「シカゴ万博」は、地理的・農業的な「フロンティア」の消滅と、産業的・都市的な「フロンティア」の出現の象徴である。新たな時代の幕開けの裏で、ターナーが感じた「フロンティアが過ぎ去る」ことへの郷愁が誕生していた。消滅しつつあった「フロンティア」への郷愁を娯楽として提供したのが、「ワイルド・ウエスト・ショー」であり、ここで形成された歪んだ先住民像は産業化と都市化の波に乗ってアメリカのみならずヨーロッパにまで伝播し、現代にいたるステレオタイプを形成することとなる。

「ワイルド・ウエスト・ショー」はBuffalo BillことWilliam Frederick Cody (1846-1917) が始めたものが有名であり、ショーには彼自身も出演していた。電信技術の発達で早馬郵便を失業した彼は、陸軍に入隊しカスター將軍の第7騎兵隊やシェリダン將軍の下で斥候を務める「インディアン・ファイター」であり、当時大流行していたダイム・ノベルの主人公として、生きる「フロンティア」のヒーローであった。狩で多数のバッファローを仕留めたことでBuffalo Billと呼ばれるようになり、名士のハンティングツアーガイドも務めた。1883年にサーカスとロデオ、そして本物の先住民を出演させた騎兵隊と先住民との戦闘を売り物にした「ワイルド・ウエスト・ショー」を始める。一座は鉄道を利用してアメリカ東部を巡業し、1887年からはヨーロッパ公演も成功させた。

ショーには西部のガンマン、ワイルド・ビル・ヒコックや可憐な早撃ち少女のアニー・オークレイ、男装の麗人カラミティ・ジェーンなどが登場したが、目玉となったのは本物の西部のヒーローであるBillと実際の先住民の歴戦の戦士が登場する騎兵隊と先住民の戦闘の再現であった。Billは陸軍のコネを活用し、居留地に拘留されていた実際に戦闘に参加した先住民らを登場させて、Little

Big Hornの戦い（1876年）を再現したのだからショーは大いに盛り上がった。前述のSitting Bullもショーの目玉であり、4か月という短い期間であったが、彼は部族の困窮を救うべく現金収入を求めて巡業に参加していた。彼ら先住民は、居留地での拘留からの解放と、自分たちの姿を広く知らせるとともに白人社会を体験し、さらに飢餓から逃れるための現金収入を目的に巡業に参加したが、彼らは観客の理性を高く評価しすぎており、ショービジネスの影響力を低く見積もりすぎている（Kilpatrick 13-14）。先住民にとってはあくまでも「芝居」であるはずの「ワイルド・ウエスト・ショー」は、そのような先住民側の目的とは関係なく、観衆にとっては「失われつつあるフロンティア」を直に、かつ安全に体験できる娯楽であった。工業化された東部では、労働者や移民などだけではなく、上流階級まで魅了した（Kilpatrick 13）。そこには1890年代以前までの「フロンティア」での冒険、生活が、消滅することなく単純な構図で再現され、産業化・都市化されつつあったアメリカ社会の中で、労働者階級・富裕層それぞれに「娯楽」として消費されていたのである。

その後、「ワイルド・ウエスト・ショー」は1900年代の初めには人気は凋落し、映画産業にとってかわられる。Bill自身もエジソンのキネトグラフ向けに演技をしたり、自身も西部劇に関わったりもした。Sitting Bull逮捕の動向を聞いた際は、結果的に間に合わなかったが救済に動いたり、気前が良く浪費家で様々な事業に手を出しては失敗することを繰り返したりと経済的に困窮した中、Billは71歳で亡くなった。西部劇映画にとってかわられたが、「フロンティア」を再構築し、現在も存在する先住民に対するステレオタイプを「娯楽」によって世界に広めたのが「ワイルド・ウエスト・ショー」であり、その後ハリウッド製の西部劇にその構造は受け継がれることになる。

シカゴ万博には「ホワイト・シティ」と対をなす、レストランや商店に加え世界中から集められた踊りや風俗、芝居を提供する「ミッドウエイ・プレザンス」も存在した。前者を文明の中心、支配する側としてのアメリカの象徴とするならば、モスクや南洋諸島の小屋、先住民とティーピー等を見世物とする後者は、従属的で未開な人種差別的ユートピアを象徴するものだ（大井 7-12）。この文脈に当てはめるならば「ワイルド・ウエスト・ショー」は間違いなく後者であるが、その成立や伝播にはアメリカの新しい時代を象徴する科学技術が不可欠であり、新「フロンティア」が旧「フロンティア」へのノスタルジーを惹起し、旧「フロンティア」を「娯楽」として再領土化する行為であったことは間違いないだろう。

おわりに

ここまで見てきたように、「フロンティアの消滅」＝先住民の脅威の消失は、皮肉なことに新たな時代への不安と動揺とコロンブス到達以来の、終わりゆく「アメリカ史の最初の時代」への郷愁を掻き立てることになった。アメリカ社会は産業化・都市化に邁進しながらもその急速な変化に不安を抱え、その解消のためのノスタルジーの担い手として、敗れ去る先住民の姿を「消えゆくフロンティア」を引き留める手段として求めたのである。この新しい時代の幕開けに際して、居留地でアメリカ社会から空間的・社会的に断絶され、部族社会も物理的・世代間で分断されて貧困の底にいた先住民はその生命や財産だけではなく虐殺や悲劇の歴史そのものを繰り返し搾取されるという新しい文脈の中での迫害が続くこととなったのである。Zintkaがウンデッド・ニーに埋葬されたのは虐殺から約100年後の1991年である。資源や土地をめぐる搾取はその後も続き、聖地回復や

古戦場・虐殺の歴史を問い直す訴訟や運動は現在も続いている。

1. 本章は英米文化学会第 163 回例会のシンポジウム：『アメリカ 1890 年代—世紀末の苦悩と混乱—〈昇り詰める者たち〉と〈這いずり蠢く人たち〉』（2021 年 6 月 12 日オンライン開催）の口頭発表のタイトルおよび内容を大幅に変更・加筆したものである。
2. アメリカ先住民の呼称については多くの議論が存在するが、ここでは「先住民」に統一する。ただし、引用や歴史的な名称・呼称として「インディアン」が使用されている場合はそれを尊重しており、そこに差別的意識はないことを明記する。
3. 2021 年 5 月にカナダ先住民学校跡地で墓標のない墓が多数発見されたニュースは日本でも報道され (<https://www.asahi.com/articles/ASP6T46DHP6SUHBI03M.html>)、この問題が遠い過去の出来事でないことが改めて浮き彫りになったと言える。

参考文献

- 阿部珠理. 『メイキング・オブ・アメリカ 格差社会アメリカの成り立ち』. 東京: 彩流社, 2016.
- 阿部珠理編著. 『アメリカ先住民を知るための 62 章』. 東京: 明石書店, 2016.
- 内田綾子. 『アメリカ先住民の現代史 歴史的記憶と文化継承』. 名古屋: 名古屋大学出版, 2008.
- 大井浩二. 『ホワイト・シティの幻想—シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力—』. 東京: 研究社, 1993.
- 亀井俊介. 『アメリカン・ヒーローの系譜』. 東京: 研究社, 1993.
- ジン, ハワード著, 富田虎男他訳. 『民衆のアメリカ史 1492 年から現代まで』 上巻, 東京: 明石書店, 2005.
- ブラウン, ディー著, 鈴木主税訳. 『我が魂を聖地に埋めよ』 下, 東京: 草思社文庫, 2013.
- 富田虎男. 『アメリカ・インディアンの歴史』 第 3 版. 東京: 有斐閣出版, 1997.
- ヘーガン, W. T. 著, 西村頼男他訳. 『アメリカ・インディアン史』 第 3 版. 札幌: 北海道大学, 1998.
- Flood, Renée Sansom. *Lost Bird of Wounded Knee: Spirit of Lakota*. New York: Da capo, 1998.
- Kilpatrick, Jacquelyn. *Celluloid Indians: Native American and Film*. Lincoln: U of Nebraska Press, 1999.

Website

- 朝日新聞デジタル. 「墓標ない 751 の墓見つかる カナダ、先住民学校の跡地」 <https://www.asahi.com/articles/ASP6T46DHP6SUHBI03M.html> (2021 年 8 月 28 日閲覧)

